

アラカルト

東京都青果物商業協同組合



佐々木順平さん

sasaki junpei

伝統を守りつつ新たな取組みにも奔走

大正時代からの歴史を誇る東京都青果物商業協同組合（東京商組）総務部で組合士として組合を支える佐々木順平さんにお話をお聞きした。東京都が「東京府」だった時代に結成された「東京府市青果実業組合連合会」が、いくたびかの組織変更を経て中小企業等協同組合法に基づく現在の組織になったのは昭和25年。当時から続く組合が青果の仕入れ代金を組合員から集金し一括して卸売会社・仲卸組合に支払う「代払い」が現存する業界である。

佐々木さんは「古い時代の慣習もあって合理化できない部分もあるのですが、それを含めてやりがいのある大切な仕事だと思っています」と話す。

●過渡期にある青果業界を支えて

「ミカン箱は持てる？」

採用試験の際にこう聞かれた佐々木さんは、「段ボール箱なら持てます」と答えたという。「今は見かけませんが、かつてはミカンやリンゴは木箱に入れて輸送していました。八百屋さんはまず体が第一であることを象徴していると思います」と話す。

「野菜や果物を扱う組合員は、飾らない人たちが多くですね。最近は兵隊として戦地に行った方が少なくなり、若輩者の私が叱られることも減ったので、寂しい思いもしています」

組合員の減少とともに少子高齢化や食文化の多様化もあり、青果店の数は減少傾向をたどっている。

「今後は青果市場の統廃合も進むと見られています。唯一の仕入先なので市場を別の所に変えるなど影響を受ける組合員は少なくないと思います。また量販店の新規出店やコンビニが青果物を本格的に扱うようになるなどの問題もあります。共存共栄が理想なのですが、課題も多いのが現状ですね」

こうした中で、東京商組では青果について学ぶ「八百屋塾」の開催など、新たな取組みも展開している。

佐々木さんは、「青果のおいしい食べ方や効用などをお客様にお伝えして、お客様の健康な食生活のお手伝いをするのも八百屋さんの仕事です。最近では『八百屋塾』に一般の方のご参加もいただいております。健康志向の下で野菜に関心が集まっていることがうかがえます」と説明する。

●勉強は「早朝」がおすすめ

佐々木さんは平成18年、37歳の時に組合検定試験に合格した。

「受験のきっかけは、先輩の組合士がいて刺激を受けたことですが、さらに私自身が勉強の必要性を感じていたこともあります」

多忙な事務局の業務を担当しながら受験勉強するのは簡単ではないが、佐々木さんは早朝の勉強が奏功したと明かす。

「出勤前の時間を勉強に充てることで、集中できたと思います。東京都中央会の講習も受けましたし、週末には長時間取り組めますので、メリハリをつけたことがよかったのではないのでしょうか。また、いわゆる『引っかけ問題』のような問題は出ないようです。過去問題をきちんと勉強すればいいと思います」

勉強したことで、法律の知識と実務に自信がついた。「法律を体系的に理解できたので、改正法などを組合員に説明する時もわかりやすく話せるようになりました。若手の私が高齢の組合員に説明するのですから、自分の頭でしっかりと理解してはなりません。また、毎年の総会の運営がスムーズにできると達成感があり、うれしいです。」

検定試験は、特に若者が受験してほしいという。

「組合の業務も多忙でしょうから、なかなか勉強する時間は取りにくいと思いますが、組合検定試験の受験はぜひおすすめします。法律の流れがわかってくると、いろいろなことが見えてきますから、組合についてまだよくわかっていない若い人にはぜひ挑戦していただきたいですね」

多様化と世代交代の進む業界で、若い組合士が増えれば新たな展開も期待できる。